

生徒一人ひとりを活かした授業づくり：  
異なる特性を持つ2クラスの授業実践から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 富美香 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007233">https://doi.org/10.14945/00007233</a>

# 生徒一人ひとりを活かした授業づくり

－異なる特性を持つ2クラスの授業実践から－

佐野 富美香

## 1. 研究の目的

本実践研究は、筆者の授業観を確立すると同時に、筆者の中学社会科の授業力向上を目的としたものである。筆者は、この2年間の大学院での学び、実習校での現場の経験を通して、授業観を確立することができた。その授業観とは、「生徒の思いがひろがる授業」である。「ひろがる」には①個の思いがクラス全体にひろがる、②個の考えがひろがり深まる、③個の生活へとひろがるという3つの意味を込めている。

修士1年時の実習経験を通して筆者の課題は、「生徒の実態に合った授業をすること」であった。

そこで、修士2年時の授業実践では、様々な生徒に合わせた授業ができるよう、生徒の特性が異なる中学1年生の2クラスで、同一単元の授業を実践し振り返ることにした。

また、その単元では、3つのひろがりを実現するために、個の思いを受け止めひろげる手立てを意識し、個の考えを深める学習活動を取り入れ、個の生活と関連する教材を用いた授業実践を行った。

## 2. 研究の方法

静岡市立B中学校で、授業観察と15回の授業実践を2年間の実習で行った。

まず授業観察では、社会科であるC先生の授業を中心に観察を行っていたが、修士2年次からは社会科に限らず、B中学校の他教科の先生方の授業も観察した。教科の枠を超えて授業観察を行うことにより、先生一人ひとりの授業に対する考えを知ることができたり、授業を行う上での具体的な手立てや授業展開を学んだりすることができ、筆者自身の授業の幅が広がったと考えられる。

授業実践は、修士1年時では5回、修士2年時では10回行った。修士2年時の授業実践では、社会科（地理）の「世界の国々の調査」の中の「世界一の人口をもつ中国」の単元を行った。対象クラスは、C先生が担当する1年生の3クラスのうちの2クラス（両クラスとも30名程度）で行った。

## 3. 授業観察から構築された視点

授業観察では、社会科のC先生の授業を中心に、他教科の先生方の授業観察を行った。授業観察を行い、筆者が授業の中で大切にしたいことが見えてきた。それが、前述した3つの“ひろがり”である。授業観察を行って気づき修士2年時の授業実践で意識した事柄

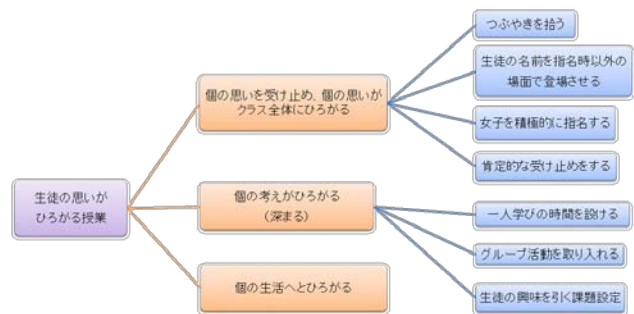


図1 授業観の深まり

を、3つの“ひろがり”に関連させると、図1となる。

教科の枠を超えて授業観察を行うことにより、先生一人ひとりの授業に対する考えを知ることができたり、授業を行う上での具体的な手立てや授業展開を学んだりすることができ、筆者自身の授業の幅が広がったと考えられる。

#### 4. M2での授業実践

##### ①授業づくり

修士2年時で行った10回の授業実践は、筆者と同じ実習校である現職大学院生に協力していただき、筆者が素案を作り、それを現職大学院生と一緒に修正等を行い、単元の授業計画を作り上げた。授業を考える際、授業観察を行って気づいた視点を意識した。その中でも特に、  
a.一人学びの時間を設けてから、ペア活動やグループ活動へつなげること、  
b.生徒のつぶやきを出来るだけ拾い、ひろげながら授業を進めること、  
c.生徒の考えを受け止めることという3点を意識しながら授業案を作成した。また、授業前・授業後には必ず現職大学院生と検討をする時間を設けるようにした。事前・事後の検討を行うことで、そのクラスの実態に合った学習課題に修正することもできた。現職大学院生と一緒に授業づくりを行うことを通して、授業案段階で予想される生徒の言動をできるだけたくさん挙げる、何をこの時間で身につけさせたいかを明確にすることなど、多くのことを学ぶことができた。

表1 実践の経過

日時	教科・領域	担当クラス	内容
2010年10月1日(金)	社会科(地理)第1時	B組	中国ってどんな国?
10月5日(火)	社会科(地理)第1時	A組	中国ってどんな国?
10月5日(火)	社会科(地理)第2時	B組	中国の人口
10月6日(水)	社会科(地理)第3時	B組	中国の農業
10月7日(木)	社会科(地理)第2時	A組	中国の人口
10月15日(木)	社会科(地理)第3時	A組	中国の農業
10月19日(月)	社会科(地理)第4時	A組	中国の工業
10月20日(火)	社会科(地理)第4時	B組	中国の工業
10月22日(水)	社会科(地理)第5時	A組	世界にはばたく中国
10月25日(月)	社会科(地理)第5時	B組	世界にはばたく中国

##### ②2クラスの特徴

A組は、もう一方のクラスに比べて授業中はおとなしいクラスである。発言力の強い男子生徒が数名いるものの、授業内容が脱線してしまうことはあまりない。つまり、授業に臨む雰囲気は確立しているのである。しかし、女子があまり発言しない傾向にある。また、事前アンケートの結果から、このクラスは地理が好きな生徒が約3割と少ないことがわかった。この授業を通して、少しでも地理に対して興味を持つ生徒が増えるよう、生徒の興味を引くような課題や学習活動を設定しようと意識しながら授業実践を行った。

B組は、発言力の強い男子生徒が数名おり、クラスの雰囲気はにぎやかである。その発言力が強い生徒の中には、発達障害と思われる生徒も含まれており、授業が脱線しやすいクラスといえる。また、事前アンケートの結果から、このクラスでは地理が好きな生徒が約6割と比較的多いことがわかった。A組と同様に、生徒の興味を引くような課題や学習活動を行い、地理に対してもっと興味をもてるような授業にしようと意識しながら授業実践を行った。

この2つのクラスの特徴を学級の落ち着きや脱線の有無などに着目して、A組のような学級を「熟考タイプ」クラス、B組のような学級を「活動タイプ」クラスと表すことにする。

### ③授業実践

表 2 2クラスにおける筆者の対応

学級	①個の思いを受け止め、クラス全体にひろげる				②個の考えにひろげる			③生活へひろげる	④その他
	i つぶやき	ii 生徒の名前	iii 女子の指名	iv 肯定的な受け止め	i 一人学び	ii グループ活動	iii 課題設定	授業と生活をつなげる	生徒との距離
「熟考タイプ」クラス	○	△ 26回	◎	△	○	○	○	○	△
「活動タイプ」クラス	○	◎ 46回	◎	○	○	○	○	○	◎

授業実践の分析結果を、表 2 で示している。

表 2 から「熟考タイプ」クラスと「活動タイプ」クラスの授業において、「生徒の名前」「肯定的な受け止め」「生徒との距離」の 3 点の項目において差異がみられる。以下で、その差異と要因について考察していく。

#### ④「熟考タイプ」クラスでの実践

「熟考タイプ」のクラスで授業を行うに当たり、最初にぶつかったのが生徒との壁である。このクラスにはあまり授業観察を行っていなかったためだ。それを象徴しているのが、表 3 の「生徒の名前を発表時以外に使っている」が、「活動タイプ」クラスが 46 回に対し熟考タイプは 26 回と少なかった点である。そのため、机間巡視の際、一人ひとりに声をかけるように意識したり、授業だけでなく休み時間にも一人でも多くの生徒に話しかけるようにしたりするなど、距離を縮めようとした。

授業内では生徒のつぶやきを出そうと、全体に投げかける回数が 150 回と、「活動タイプ」クラスよりも多かった。そうすることで、少しずつ生徒もつぶやいたり反応を返したりするようになった。

表 3 2クラスにおける筆者の対応

クラス	“ひろげる”手立て	単元を通しての合計回数
熟考タイプ	生徒の名前を発表の指名時以外に使っている	26 回
	指示をしている	94 回
	指導的配慮がなされている	10 回
	全体への投げかけがある	150 回
	肯定的に受け止めている	5 回
活動タイプ	生徒の名前を発表の指名時以外に使っている	46 回
	指示をしている	104 回
	指導的配慮がなされている	25 回
	全体への投げかけがある	121 回
	肯定的に受け止めている	25 回

#### ⑤「活動タイプ」クラスでの実践

「活動タイプ」クラスで、頻繁に授業観察を行っていたため、生徒との関係はとても良好だった。「生徒の名前を発表時以外に使っている」という項目でも、46 回と高い値を示している。

このクラスには、発言力の強い男子生徒数名がいる。多々脱線することはあるが、授業の内容について自分の考えや知識をつぶやいていることも事実である。このような生徒を肯定的に受け止めよう意識しながら授業を行った。肯定的に受け止めた場面は、熟考タイプでは 5 回であったが、活動タイプでは 25 回と約 5 倍と良好だった。また、このクラスには支援を要する生徒が多かったため、生徒たちに配慮した結果であると考えられる。

## 5. 2つのタイプにおける手立てと課題

熟考タイプでの授業は、生徒との関係があまりできていなかったため、個がつぶやいたことを、全体に投げかけることを繰り返し行ってきた。そのため、「個の考えを全体にひろげること」は可能であった。

熟考タイプにおける課題は、個の理解を深められているかということだ。つまり、個への深まりが課題となってくる。

表 4 2つのタイプのクラスにおける手立て

	熟考タイプ	活動タイプ
①個の思いを受け止め、個の思いがクラス全体にひろがる	<p>&lt;対応&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個の考えを全体にひろげるために、個の考えを把握できるような机間巡視を行う。</li> <li>まずウォーミングアップとして口を動かす。(導入時)</li> </ul> <p>&lt;気をつけること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全体に投げかけてもスムーズに動くため、教師主体にならないように注意する。</li> <li>個がつぶやけるような雰囲気作りをする。</li> </ul>	<p>&lt;対応&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒のつぶやきや考えを拾う。</li> <li>生徒を肯定的に受け止める。(あまり強く注意しない)</li> <li>いろいろな子が参加できるように生徒の名前を呼んだ。</li> </ul> <p>&lt;気をつけること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一部の生徒だけで授業が進んでしまうことがある。</li> <li>クラス全員が参加できるようにする。</li> <li>個の言動を価値づけること。</li> <li>発言力が強い生徒を受容しつつ、コントロールする。</li> <li>クラス全員で考えられるような学習課題を設定する。</li> </ul>
②個の考えがひろがる(深まる)	<p>&lt;対応&gt;</p> <p>&lt;気をつけること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>活動を伴わせながら説明する。</li> <li>知的好奇心をゆさぶるような課題を設定する。</li> <li>活動を行う前に、その活動の有効性を説明する。</li> </ul>	<p>&lt;対応&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理解できていない生徒を中心に机間支援を行う。</li> <li>具体物を用いながら説明する。</li> </ul> <p>&lt;気をつけること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>課題をわかりやすくする。</li> <li>課題に対して答えが出て、もう1度別の生徒に言わせて、本当に全員が理解したかを確認する。</li> </ul>
③個の生活へひろがる	<p>&lt;対応&gt;</p> <p>&lt;気をつけること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の既習知識から授業を構成する。(今回は生徒の生活へと戻すことができなかった)</li> <li>生徒の考えを覆すような、資料等を提示する。</li> </ul>	<p>&lt;対応&gt;</p> <p>&lt;気をつけること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の生活体験を引き出すような声かけをする。</li> <li>生徒の実生活を想定しながら授業を構成する。</li> </ul>

一方、活動タイプでの実際の授業は、生徒一人一人への声かけを主とする傾向があった。しかし、一人ひとりへの声かけはできているが、その一人一人の考えや思いを、クラス全体に広げられてはいない。活動タイプにおける課題は、個の考えを全体にひろげることである。生徒一人ひとりの考えが、全体に広がっていくような手立てを考えなければならない。

## 6. まとめと今後の課題

2クラスで授業実践を行ったが、「熟考タイプ」クラスでは“個への深まり”が課題となっており、「活動タイプ」クラスでは“個の考えを全体にひろげる”ことが課題だった。

授業実践を改善するならば、「熟考タイプ」には既習知識を覆すような、意外性のある資料を提示すれば、もっと個の中で深まりがあったかもしれない。「活動タイプ」では、支援を要する子や学習に対して無関心の生徒がいるなど、さまざまなタイプの生徒に対応していかなければならない。したがって、どんな生徒にも一目で考えられるような資料を提示すれば、全体へひろまりがあったかもしれない。このように、両クラスに共通している課題は、「より深い教材研究の必要性」だということに気付いた。

特性の異なる2クラスでの授業実践を通して、“3つのひろがり”の枠でしか授業を見ていなかった筆者が、異なるタイプのクラスでも適応できる力を身に付けることができ、手立てが以前と比べて格段にひろがった。

また、以前は“3つのひろがり”と教材研究を個別に考えていたが、現在は、授業をつくるということは、教材と向き合い、教師自身がその教材について深く学ばなければ、生徒思いは“ひろがって”いかないということを痛感した。

今後は、教材研究を深めることで多様なタイプの生徒に対応できる力を身に付けていきたい。